

議 事 概 要

1 開会

- ・事務局から開会の挨拶を行い、配布資料の確認と欠席委員の報告を行った。

【配布資料の確認】

- ・会議次第
- ・資料 1 : 委員名簿
- ・資料 2 : 平成 20 年度 環境教育関連事業の実施状況
- ・資料 3 : 環境教育関連施策・事業一覧(案)
- ・資料 4 : 環境教育プログラム・環境副教材に関するアンケート(案)
- ・資料 5 : 今後の推進策(事務局原案)

【欠席委員の報告】

- ・丸山委員は欠席。

2 挨拶

- ・札幌市環境局環境都市推進部長から挨拶があった。
- ・各委員より、近況報告など、簡単な挨拶があった。

3 議事(1): 環境教育関連事業の実施状況について

- ・資料 2・3 に基づき、事務局から説明を行った。

実施中または実施済みの事業

- ・校外学習用バス貸出
- ・環境教育へのクリック募金
- ・環境プラザにおける総合学習支援
- ・環境教育リーダーの追加養成
- ・環境教育施設バスツアー(新規事業)
- ・環境未来カップ 2008
- ・こども環境サミット札幌(サミット関連事業)

今後進めていく事業

- ・環境教育関連施策・事業一覧の作成
- ・環境教育プログラム、環境副教材の周知・活用の推進
- ・環境コンテストの実施

【質疑応答・意見等】

< 校外学習用バス貸出について >

・結構たくさん使われたと思う。また、現場での学習を通じて子どもたちが実感するという事は、非常にいいことだと思う。(小林会長)

< 環境教育リーダーの追加養成について >

・環境教育リーダーの養成は、毎年 5 人でもいいので定期的に行うシステムがいいと思う。いかがだろうか。(森田副会長)

- ・前は平成 16 年度だったので、今回は 4 年ぶりになる。追加養成は、リーダー派遣の需要と供給のバランスを考えて実施しているというのが実情であり、リーダーの派遣件数が右肩上がりに増えれば、養成もしっかりやっていくべきだと思う。(事務局：環境局 吉津係長)
- ・札幌市では、環境に関していろいろな事業を実施しており、その中でリーダーの養成が恒常的にできるのか、それとも無理なのかということになるが、恐らくどこかの場で協議しなければいけないと思う。市の内部でも予算措置や折衝を行ううえで、どの位のニーズがあり、活用されているかというデータが必要だと思うが、そのうち、どこかで考え方を整理していただきたいと思う。(小林会長)
- ・今の話を聞いて思ったのだが、リーダー派遣の件数がすごく少ない。今年は 11 件で、小・中学校への派遣は 4 件のようだが、今年は特に少ないのだろうか。また、派遣件数が少ないのは、利用しづらいシステムだからかと思ったが、いかがだろうか。(伊藤委員)
- ・派遣件数については、昨年度はもっと多くリーダーの方は忙しかったが、今年はあまり件数が出ていないという状況である。(事務局：環境局 吉津係長)
- ・前任校の福井野小学校でリーダーの方に来ていただいたが、打合せとしては、一度現地に下見に来るときに行くくらいで、雨天時のプログラムも考えてくれるので、活用しづらいということではないと思う。そのときの派遣では、リーダーのほかに西区地域振興課、さけ科学館の職員を含め十数人に来てもらい、非常にいい学習ができたと思っている。(米倉委員)
- ・学校教育の中で環境教育をするとしたら、1 回では無理である。例えば、同じリーダーが年 4 回授業に入るということではできるのだろうか。(伊藤委員)
- ・同じ学校の同じところには年 1 回の派遣としており、今のところ複数回の派遣はできない状況である。(事務局：環境局 吉津係長)
- ・それは、リーダーの数が少ないということだろうか。(伊藤委員)
- ・予算の問題である。(小林会長)
- ・お金の話をすると、リーダー派遣は 1 人 1 回 5 千円である。自然観察の派遣が多く、1 回で多人数を派遣することになるので、件数がかかなり多くなると、確かに予算的に難しくなってくるというのが実情である。もちろん、学校の中で環境教育を行う際には、何回かするようなカリキュラムが必要だと思うが、実際にフィールドに出るときにはリーダーに来てもらい、その他は学校の先生に組み立ててもらっているという状況である。(事務局：環境局 吉津係長)
- ・各学校の裁量で使えるお金がもっとあればいいのだが、教育委員会と学校は極めてお金をもらっていない組織である。環境局も、残念ながら非常に限られたお金をどうやって使うのかという状況である。(小林会長)

< 中学校を対象にした事業について >

- ・事業の実施状況を見ると、小学校が中心になっている。予算の問題もあると思うが、クリック募金の教材や校外学習用のバスを中学校にも対象にできないのだろうか。(小路委員)
- ・確かに予算の兼ね合いということで、まずは小学校からということで実施しているのが実情で、なかなか厳しいところである。(事務局：環境局 吉津係長)
- ・市役所の中でも、部局間で調整して環境教育の予算の枠が増えればいいのだが、そうするためには何が必要なのか。(小林会長)
- ・子どもたちの環境教育は大切であるということについて、関係者はみんな認識は持っている。ご指摘のあった話を進めていくには、環境局と教育委員会で連携をとってやっていかないと、なかなか難しいところである。(事務局：環境局 宮佐課長)
- ・環境首都宣言をしたこともあり、少しずつ予算枠を取って、本当に重要なことに取り組んでいただきたい。(小林会長)
- ・なかなか難しいとは思いますが、例えば、環境教育施設バスツアーは企業と共催している。こういったところを中学校にも広げていくことは可能という気がするし、それができれば中学校の生徒の視点も

広がると思うので、ご検討いただきたい。(小路委員)

・企業から協賛をいただければ、確かに使えるお金が増えることになるので、協賛の協力をいただけるようなことを進めていきたいと思う。(事務局：環境局 吉津係長)

・中学校は教科の縛りも多く、教材もなければ環境について扱うのが大変だと思うので、クリック募金の教材の寄贈は、少しでも中学校に広げていただきたい。(森田副会長)

・この教材は、配られてからどのように使われているのか。例えば、燃料電池自動車を電解質がだめになったということで購入換えれば、結構な値段になる。消耗品は仕方ないが、壊れたからまた次をとということではもったいないし、その分を少しでも中学校に寄贈できるのかと思う。(大野委員)

・理科や技術の先生が既製品を改良して簡単に安い教材を作ったということがあった。そのような開発について、教育委員会で企画してもらえばいいかと思う。私も今、主に保育園と幼稚園を対象に取り組んでいるが、案外身近なもので安く作れる教材がたくさんある。そういった点は知恵を絞ればもっと可能性があると思う。(藤田委員)

・例えば、木炭に紙を巻いて塩水をかけただけで電池で光がつくような、非常にシンプルな原理で不思議だと思わせるものは、藤田委員のような熱心な人がいるからできることである。それをテキストに書いて、簡単なものでどの先生も身近に取り組めるようなものが札幌発の副教材としてできていくといいと思う。(小林会長)

<環境コンテストについて>

・環境コンテストは大変いいと思う。私のところでは、主に高校生を対象にしたポスターセッションを10年やっているが、子どもたちには継続性がある、大学の環境学部や環境の会社に入る人がたくさんいる。なので、是非これを膨らませていただきたい。また、優秀作品には賞を出して、功労をねぎらってもらいたい。何か子どもの心にひっかかるものを考えてもらえば、子どもも長続きするし、一緒に親も長続きする。また、CSRということで企業に声をかけると、人を派遣してくれたりすると思う。お金を使わない活用法を考えていただければと思う。(藤田委員)

<こども環境サミット札幌について>

・資料2の最後にこども環境サミット札幌の宣言書が載っているが、海外から10か国、日本も入ると11か国の子どもを札幌に招いている。それぞれの国で子どもたちの認識の違いは相当あったが、子どもの提案や意見をなるべくそのまま取り入れている。最初の部分に「エコの心」、「エコの目」、「エコの手」というところがある。初めて知った言葉だったが、ロシアのノボシビルスクの子どもの提案を取り入れた。「緑を大切にします」の中にある、「紙の分別・リサイクル」はミュンヘンの子どもの意見である。紙は熱帯林を切ってドイツに持ってきたものからできているという意識が非常に強い。また、「水を大切にします」の中にある、「水を節約して上手に使います」と言ったのもミュンヘンの子どもである。ミュンヘンではきれいな山の水を無処理同然で飲むのが望ましいということを実践している。水を節約していた。それに対して、シンガポールは都市国家であり森林がないので、街をきれいにしてそこに降った水を高度処理して使うことを自慢している。また、「ごみを減らします」の中にある、「持ち物を最後まで大切に使い」とか、「古いものを大切にします」というのは、アメリカのポートランドの子どもの意見である。特に、彼らは古物の循環再利用を強く意識している。それから、「食べ物を大切に」というのは、インドの子どもの意見である。インドではカーストのさらに下があり、全く食べられない人々もいるので、食べ物を大切にしようという話をしてきた。それから、「水を大切にします」の中に、「水資源の限界を意識して、工場から出た排水をできるだけキレイに」という部分があるが、これは中国の瀋陽の子どもがどうしても強く入れてくれと言ったので取り入れた。このように、相当議論をして作っている。子どもたちはそれぞれの国や地域に帰ってから報告会などを行っているだろうから、これがだんだん広まっていくことを期待している。(小林会長)

<エコライフレポートについて>

- ・環境教育関連施策・事業一覧の3ページにある達成目標で、エコライフレポートの提出枚数が54万枚になっているが、この目標値の設定理由を知りたい。(宮森委員)
- ・2010年度までの4年間で、小学校の児童と中学校の生徒13万5千人が年1回提出するとこの数字になる。非常に高い目標を設定したが、現実はなかなかうまくいかず厳しい状況である。教育委員会とも協議をしているが、これからもっと実践してもらえるようにしたい。(事務局：環境局 吉津係長)
- ・エコライフレポートを夏版・冬版といろいろ作っているが、マンネリになっても困る。一過性になってしまったり、学校は忙しくて手が回らず配れないところもあるなど問題点もあるので、どこかの時点で見直しが必要だと思う。これを見直すのは環境活動推進会議になるのだろうか。(小林会長)
- ・環境活動推進会議がメインになるが、この委員会でも受け付ける。また、学校でのやり方についての提案は、常時こちらで受け付ける。(事務局：環境局 吉津係長)
- ・このレポートを続けるためには、常にリニューアルするとか、気づいた点を直していくといい。子どもたちも世の中も変わっていくので、生き生きとした形で、マンネリにならないようにしていただきたい。(小林会長)
- ・先日の会議で、今年度の取り組みがやや減少し、特に中学校は減少しているという話があったので、大丈夫なのかなというのが頭にあった。19年度の冬休みと20年度の夏休みで比較すると、取り組んだ学校数が半減したようなので、そういう状況を知らせる方法が学校にあれば、もっとマインドアップできるのかなと思った。(宮森委員)
- ・中学校は教科担任制であり、環境教育がいろいろな教科に分散しているので、学校全体で取り組むのは非常に難しい。私は理科が担当なので、理科の教員を中心にして、まず教科の中で一斉に配って意図を説明する形ならとれると思う。学校全体に配布されても、認識されずに終わる場合もあるので、どこかでまた呼びかける必要があると思う。(小路委員)
- ・どの教科でもないということであれば、校長先生から各ホームルームで配るようお願いすることはできると思うが、いかがか。(小林会長)
- ・できると思う。ただ、学校にもいろいろな催しなど、すごい数の資料が届くので、その中で何が大事なのか判断しなければいけない。先ほどの会長の話のように、そういう呼びかけを校長を通してすることはできると思う。(米倉委員)
- ・先ほどの「エコチル」も企業の広告がいろいろ載っているので、学校によっては配らないということも当然あると思う。だから、協賛を得るのかそれとも市の予算で独自にやるのか、そしてちゃんと魅力とかおもしろさを与えるということをきちんとどこかで整理して、次に印刷するときなどはその辺も考えていただきたい。(小林会長)
- ・中身の検討も行っており、また、今は各区の幹事になっている校長先生のところに環境局からお願いに回っているところであり、周知とか中身の検討を進めている。(事務局：環境局 吉津係長)
- ・環境問題では、数字にすることになじまない要素がたくさんあるが、こういう枚数で出てきてしまうものは仕方ない面もあると思うので、これを中身のある形につなげていただきたい。(小林会長)
- ・エコライフレポートは、出したら出しっぱなしではなくて、何か返ってくるようにすればいいと思う。そういうことがあると、子どもたちも、委員会で取り組んだ人もやりがいがあると思う。そういう双方向性にするといいのではないか。(三木委員)
- ・昨年度も、これだけ取り組んで、CO₂がこれだけ削減されて、それを植樹にするとどれぐらいになりますよという認定証は各学校に送っているが、それ以上に返ってくるものとして、せっかくやったのがこんな形になったのだ、ということについて検討させていただきたい。(事務局：環境局 吉津係長)
- ・何か賞があると良い。また、三木委員のところのエコ委員会というのは、先生方の委員会なのか、それとも子どもの委員会なのか。(小林会長)
- ・児童委員会の中で環境委員会をつくらうと提案したら、子どもたちがエコ委員会という名前をつけ

て活動しているところである。(三木委員)

4 議事(2): 今後の推進策について

- ・資料4・5に基づき、事務局から説明を行った。
- ・副教材に関する手引きと授業への活用事例について、白崎委員から説明を行った。

【質疑応答・意見等】

<プログラム・副教材に関するアンケートについて>

・欠席した丸山委員から意見をいただいている。副教材のアンケートについて、授業以外で活用した場合や、アンケートの回答者がどのように活用したか等について設問を追加してはどうかという意見であり、そのような内容を追加したいと考えている。(事務局：環境局 吉津係長)

・アンケートについては、大野委員からあらかじめ提案のあった部分を修正したものである。また、丸山委員からの提案を取り入れてアンケートを作るということである。大野委員から何か追加があればお願いしたい。(小林会長)

・私のコメントはテクニカルなもので、なるべく回答をもらえるように設問の配列などを工夫していただければということである。(大野委員)

・このようなアンケートは、なかなか返ってこないものである。記入したらそのままファックスに入れられるスタイルにするなど、工夫があればいいと思う。(藤田委員)

・アンケートをいつとるかということで、大きな影響があると思う。プログラムは4月ではなくもっと後で配られたものなので、現状のデータでとるのか、いろいろ取り組んでからとるのかでは、かなり違うと思う。(三木委員)

・このプログラムが配られたのは、たぶん9月くらいである。10部配布されたのはいいと思うが、おそらく先生方は、目を通したものの授業に取り入れるのはこれからだと思う。設問の中に授業での活用についての内容もあるので、アンケートの配布時期は考える必要があると思う。(米倉委員)

・中学校は教科担任制なので、プログラムの活用頻度はどうかと聞かれても、教員個人に聞くのか、それとも学校として聞くのかで違ってくるので、そのあたりをご検討いただきたい。また、各教員がまんべんなくプログラムに取り組むわけではないので、活用しやすかったもの、しにくかったものという問いも当てはまりにくいと思う。このように、中学校・高校の特殊性もあると思うのでご検討いただきたい。(小路委員)

<今後の推進策について>

・欠席した丸山委員から、ふたつ意見をいただいている。ひとつめは、この委員会に関する情報提供をホームページですべきということであるが、ご指摘のとおり情報提供は必要であり、昨年度の結果も含めて、まとめ次第公開したいと思う。もうひとつは、環境プラザの運営についてこの委員会の議題にしてはどうかということであるが、現在、札幌市環境局で会議体の再編について検討中なので、まだ結論は出ないが、その中で検討しているところである。(事務局：環境局 吉津係長)

・環境コンテストを今年度から開催予定ということであるが、これは、例えば学校の実践例を評価するのか、それとも子どもたちの夏休み・冬休みの課題についてなど、具体案はあるのか。(西村委員)

・まだ煮詰まっていないが、子どもたちを対象にということ考えている。あと、学校単位だけでなく、グループ単位でもという形にしたいと思っている。良い取り組みを発表してもらうためにはどうすればいいかということで、検討させていただきたいと思う。(事務局：環境局 吉津係長)

・プログラムには家庭・地域・職場編がある。例えば、コンテストでは学校や家庭での実践発表例や、長期の休みで取り組んだものを家庭との兼ね合いでできるとか、地域での実践例も取り入れれば、プログラムの全分野で何か打ち出すことができると思う。家庭・地域・職場編はちょっと沈みがちな

で、このあたりをお願いしたい。(西村委員)

・家庭と学校はつながっているので、プログラムのつながりで先生が持って行ってくれば、家庭の場合は広がるかと思う。職場については、「さっぽろエコメンバー」という新しい登録申請の取り組みがあるので、これらの職場にプログラムを周知し、職場での実践例を出していただければいいのかなと考えている。(宮森委員)

・今の連続性ということは重要で、先ほど小路委員から話があった福移小・中学校で連携して行っている農作業で実感したことが、農業に関係なく食べる一方の他の子どもたちにつながるような何かがあるとなお良い。実際に畑で作業しないと実感できないこともあるし、堆肥でも、リサイクルでもそういう縦と横のつながりをどのようにとっていくかなど、社会全体で環境教育は重要であると感じた。(小林会長)

・中学・高校と学年が上がると先生が困っていることがある。最近、リサイクルは無駄であるとか、地球温暖化は実は間違っているという話が出ているので、生徒がそのことについて質問してくるそう。答えに困ることもあり、これがスタンダードだという教科書のようなものを作ってくれという意見もあった。小学校ではそれほどでもないのに、副教材などで教えるということでもいいと思うが、地域や社会では先ほどのような意見を持つ人もいるだろう。そういうことにどう対応すべきか、どこかで考えなければと思った。私も考えなければいけないが、ご検討いただければと思う。(大野委員)

・よく売れている「偽善エコロジー」という本に、コンポストはかえっていけないという話がある。畑で作業していればミミズが分解できるものとできないものがあるので、ドイツの小学校で行っているミミズ教育のような畑そのものを見ると、割れた蛍光灯を台所ごみと一緒に出してはだめだということがわかる。(小林会長)

・さっきのロシアの子どもの「エコの手」、「エコの目」というのは、合理的というか、科学的にしつかりと、その上で心も持って考えようということだと思う。冷静かつ客観的な判断ができるような教育の場を設けていただければと思う。(大野委員)

・皆さんのいろいろな意見を聞いて、なるほどと思うことの連続だったが、白崎委員の資料を見てすごくびっくりした。先生方がこんなにきちんと考えて授業をしているというのは、素晴らしいと思った。(高坂委員)

・親御さんにこういう資料を見せると、本当にこんなにやってくれているのだなと思う。(伊藤委員)

・きっと感激すると思う。私が参観日に行くと、先生は結局どうまとめたかったのかな、という授業もたまにある。先ほどのような授業をどこの学校でも進めるのは大変だと思うが、素晴らしいと思った。(高坂委員)

・そこまでしてくれる先生は表彰ものなので、もっと教員の数を増やすとか、受け持ちを少人数にしていけないと、先生方はみなくたびれてしまう。(小林会長)

・先生もみんな一生懸命だとは思いますが、すごく手が回らない感じがする。昔よりも先生は忙しいのだろうか。何か忙しそうで、話しかけにくいこともあるので、いろいろ先生も大変だと思う。(高坂委員)

・この委員会は「推進委員会」ということで、実際にできた基本方針をどうやって推進していくかということになるが、いろいろな副教材ができたので、それを使っていける形にすることが必要だ。いろいろな部門から皆さんに出席してもらっているので、知恵を結集して、札幌市としての環境教育が円滑に進めばと思う。教育委員会がかなりの苦勞を担うとは思いますが、みんなで協力してできればと思った。(森田副会長)

5 議事(3): その他

【委員の任期について】

・今後の推進策が概ね見えてくると思われる来年度末まで、皆様に引き続き委員をお願いしたいと考えている。(事務局:環境局 宮佐課長)

【次回（2回目）の委員会の日程について】

・次回の委員会は2月頃を予定しており、議事については、環境教育の実施結果報告とその評価を予定している。詳細については、年明けに調整させていただきたい。（事務局：環境局 宮佐課長）

6 閉会

（会長から閉会の挨拶）

- 以上 -